

村落研究の「多様化」と、研究手法の模索

中国農業試験場 飯坂正弘

1995年の大会は、11月17日のエクスカージョンから始まった。美山町の茅葺家屋保存地区もそうであるが、亀岡市犬甘野地区における集落営農活動の見学は、その時点ですでに私にとっては「村研」らしからぬ印象を受けた。それは逆に言えば村研に参加している研究者が、これまで起こってきた、あるいは現在起こりつつある村落の変動に対し、それを捉えるための方法・枠組みを模索していることの現れであると受け止められた。

自由報告の内容も、セッションいくつとは区切りながらも、もはやそうした区切り方では対応できないほどバラエティに富んだものであった（レベルはともかく）。文量の制限もあり、そのすべてをフォローはできないが、「村研」といえば、徹底した村落内フィールドワークに基づいたモノグラフ的な発表が多いと思いこんでいた私にとっては、玉先生、斉藤先生、渋谷先生の報告は、ある意味で新鮮に思えた。高木先生・森田先生の報告は、歴史人口学の方法と現代栄養学も援用された研究方法として、大学院で人口学を学んだ者としては個人的に非常に興味深いものであった。

その一方で高山先生、加藤先生の報告は、農業就業人口の減少（担い手不足？）、過疎化・高齢化の終末段階に近づきつつある山間村落における農地保全のあり方を考えるうえでも、重要な点を指摘されたように思える。

矢野先生の諏訪の出稼ぎ杜氏に関する報告は、これまで農閑期の収入確保のために単純労働に従事するといった枠組みで捉えられがちであった『出稼ぎ』に対する研究者のイメージも少し変えざるを得ない内容ではなかったか。もちろん現時点ではそのあり方も変わったではあろうが、厳しい条件下に居住し農業を営む者にとって、村落内における過当な競争は、一歩間違えば共倒れ、村落の崩壊につながる。それを村外における杜氏への出世競争に置き換え、その地位を村内における社会的地位に反映させる方法は、厳しい高地に生きる農民のある種の知恵ではなかったか。そんなことを考えた。

テーマセッション「村落研究と環境問題…」については、生態学などこれまで「他分野」にあった方々の報告があり、学会としては新鮮であったかもしれないが、農業試験場に勤める者にとっては申し訳ないが既知の内容であった。しかしたとえば今日の日本農業における化学肥料や農薬、あるいは資材も含むかもしれないが、化学合成物質の多量使用は、その効果や安全性を論ずる以前に海外から問題視されており、「そこまでいろいろ化学物質に頼らなければ日本の農業が成り立たないのなら、もはや日本では農業をするべきではない。われわれが環境に優しい方法で安い農産物を提供しよう」という農産物輸出国のオフレコ発言も飛び出すほどである。そうした問題提起に対し、日本の研究者や農業者はどう応えていくのか。・・・答えは村落の中にあるような気がする。

藤村先生の自らの調査経験のなかから導きだされた「他者から見られている状況」（まなざし）は、村落内における所有関係のみならず、研究者の社会（学界とでも呼ぶべきであろうか）にも通じる概念である。引用という他者から見られている状況が、学界におけるその人の研究分野の所有を認知することにつながる。裏を返せば、引用という他者から見られている状況を作らないことによって、学界からその研究者の存在を消すこともできるわけである。

話が脱線してきたので、この辺で稿を閉じる。最後に、報告のキャンセルがあったことは、事情は知らないが、それが大学院生であっただけに余計残念である。